

文学館だより

平成30年 6月 1日
若山牧水記念文学館
TEL 0982-68-9511
文 貴 日 高

相添^{ひばり}ひて啼きのぼりたる雲雀ふたつ啼きのぼりゆく空の深みへ

富士山南の大野原を訪れた時の作。鳥への憧れは生涯変わらず、約 600 もの鳥の歌がある。大正 11 年 6 月詠

第8回青の國若山牧水短歌大会 作品募集中

第7回 青の國若山牧水短歌大会応募作品より

- 大 賞 ハイジャンプ放物線^{せな}を背で描くおへそは空に頂点記す
- 一般の部自由題 弱音はく子と叱りし日青青の堀切峠メールで送りぬ
- 一般の部題詠「空」 「すみません回送中です」空色のラインのバスの真後ろを行く
- 小学生の部 ときよう走ぼくの順番一組目フライングしそうな心ぞうの音
- 中学生の部 雨音が足音を消して声を消し傘に当たった音だけが響く
- 高校生の部 二番目は以下同文で略される目指すは一つ全文読み上げ

昨年度の入賞全作品につきましては、文学館ホームページにてご覧いただけます。

今年も青の國若山牧水短歌大会の作品募集が始まりました。本大会も今年で第8回を迎えます。既に 200 作品を受け付けています。

短歌の決まりごとは五・七・五・七・七という定型だけです。もちろん字余り、字足らずの破調があって結構です。俳句と違って季語を詠みこむ必要はありません。短歌愛好者のみならず、多くの方にご投稿いただき、本大会を盛り上げていきたいと思っています。ご家族で、職場のみなさんで、友だち同士で短歌を詠んでご投稿ください。お待ちしております。

あなたの想いを短歌にこめて・・・

【部門】

(一般の部)

- ◇全国から応募できます。
- ◇自由題および題詠「年」に、それぞれ一人1首ずつ応募できます。
※題詠には必ず「年」の文字を入れてください。

(小学生の部、中学生の部、高校生の部)

- ◇宮崎県内の児童生徒が応募できます。
- ◇一人1首で、題は自由です。



【募集期間】 平成30年8月10日(金) 当日消印有効

【応募および問い合わせ先】

〒883-0211

宮崎県日向市東郷町坪谷1271

若山牧水記念文学館 青の國若山牧水短歌大会 係

TEL 0982-68-9511 (月曜日 休館)

大会の詳細につきましてはホームページをご参照ください。

『父子旅』若山 旅人 若山牧水全集（増進会出版社）発行によせて

牧水は 40 歳の時、長男旅人を連れて坪谷に帰郷しています。その時の様子を旅人氏が書き残している文章を目にしました。牧水先生が身近に感じられたひとときでした。

（略）そもそもこの旅の出発は 3 月 8 日（大正 13 年）だったから、牧水が私を連れて故郷の富高駅（現日向市駅）に降り立った 3 月 27 日迄には、三週間近く同好の士に逢う為の長旅が続いた訳だった。名古屋から始まって大阪、神戸、広島、山口、北九州、福岡、長崎、熊本の各県に泊りを重ね数百の人々と盃を交し、談論風発の時を積む、という旅の終り。それは、漸く目的とした母マキ女の住む古里に辿り着いた時だったから、普通ならこれは無茶苦茶な旅程だろう。その為の使命感の様なものが牧水をそれまで支えていたのだが、それだけにその疲労というものは常識を超えたものであった筈である。それを私はずっと見ていたのだった。超人的な生理の酷使だった。今にして思えば牧水の生涯が短か過ぎたのも当然だった。私達が富高町に着いた 3 月 27 日は晴天だった。日向の山国の春は硝子の様に澄み透っていた。当時の日本にはまだそれ程の美しさが在ったのだった。私には初めて見る谷間の村だった。スイスに多い東西に長い谷で、従って左岸に位置する牧水の生家は日当りのいい温かな家だった。街道から石段を昇ったとっつきに玄関があった。牧水が帰って来るのを知っていたその家の気配は、息をひそめるように静かだった。玄関をあけると驚いた事にマキ女を真中にして五六人の家族が待っていた。二階の窓から富高発の馬車が谷の裾を回って来るのを見て待っていたのは、マキ女だったそうな。一座には張りつめた様な緊迫感があった。その時、私は生れて初めて見る光景に出逢った。牧水が玄関の板縁に跪いて泣いたのである。袴の裾が土間の土に食い込んでいた。この時に初めて、私は昨日からこっち牧水がいかに落着かなくうわの空になっていたが判った。父立蔵の死以来帰郷出来なかった牧水は、母の目を見るのが何より怖かったのだ。牧水にとって、姉の様に（ま）して女の友達の様さにさえ思われる母、とはっきり文章にしていた程の母マキ女が、長じるに従っていつの間にか畏怖の対象に変わっていたのだ。そして、手を取られる様にして囲炉裡に坐らされてからは家中ひっくり返る騒ぎになった。庭で屠った鶏の鍋や茸の皿。いろりに坐った牧水は興奮で泣きながら喋り散らしながらの酒となった。旅行中一度としてこういう父の姿を見た事は無かった。それからの 4 月 16 日故郷出発迄の滞在の有様は本全集第十巻 508 頁以後の牧水書簡の通り。

そして結局の処これだけの犠牲を払って母を迎えに行った訳なのだが、それは遂に実現しなかった。牧水の願望は余りに非現実的であり、マキ女が生涯守って来た古里の絆を解く迄には到らなかったからだろう。牧水は単純にマキ女の身柄だけを望んだのでは無かったろうか。マキ女にして見れば昔に変わらぬ繁やん（牧水の幼名）の駄マツ児振りだったろうし、望まれた母親も断られた息子も、両方共にこの旅から得たものはお互い、悲しみだけだったのである。

唯私には、生家の二階から谷向かいに咲く白い花のことを、雪洞の様に一つ一つ離れて咲いているのが山桜だ、と父から教えられた時、即座に、あ、この言葉は昔祖母（ばア）ちゃんから教えられた言葉なんだと思い、父の母恋いの姿に感を深くした事だけは忘れられない。この牧水のひと言は、私の生涯にとって重要なものを残して呉れたのだった。

お知らせ

- 『牧水かるた』のパッケージが新しくなりました。取り札、読み札はこれまでと変わりありません。価格も変わらず 1,500 円です。
- 伊藤一彦館長の第 14 歌集『遠音よし遠見よし』に第 33 回詩歌文学館賞が贈られ、5 月 26 日、岩手県日本現代詩歌文学館において贈賞式が執り行われました。
- 『NHK 短歌』5 月号より 3 回にわたり、県内在住歌人大口玲子氏（りょうこ）が、「テーマで読む近代人気歌人再発見」と題し、牧水を連載中です。5 月号は牧水短歌一首ずつわかやすく解説してあり、とても読みやすかったです。



お礼

- 5 月 10 日（木）坪谷小学校の先生方と 15 名のつばやっこたちが牧水生家を訪れ、清掃作業をしてくださいました。途絶えることなく毎年重ねられている牧水行事のひとつです。ありがとうございました。秋もよろしくお願いします。